

■ 閉会のあいさつ

丁 貴 連（宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター長、国際学部教授）

コロナ禍の中で多くの行事が中止されている中、皆様のおかげさまで本シンポジウムを無事開催することができました。厚く御礼申し上げます。また、本シンポジウムのために学内外は無論、海外から参加なされて貴重な講演と発表、コメンテーターを務めて下さった皆様にも心より御礼申し上げます。

実は、私は昨年12月に開催された日光プロジェクトシンポジウムに参加し、5グループの学生によるプレゼンテーションにコメントをさせていただきました。

皆さんもご存知のように、日光プロジェクトは2015年から毎年開催されています。この5年間、外国人留学生と海外経験のある日本人学生は、国際交流協会会員や行政職員、大学教員らと日光市の各エリアを回り、地元の方々と交流しながら、日光市が国際交流都市としてさらなる発展を遂げていく上で必要な様々な提案を毎年行なってきました。その提案がいかに反映されているのか、シンポジウムが開かれる12月頃になると、気になっていたのですが、今日、野口一徳様の講演を聞きながら、2015年より様々な視点から提案を行なってきた学生たちの声は何らかの形で反映されていることを知り、これまでの学生たちの努力が無駄ではなかったことにホッとすると共に、彼らの活動を政策に生かして下さった日光市に感謝申し上げます。

今回のシンポジウムのテーマは、「国際交流都市日光の再発見ー日光のインバウンドについて留学生と考える」ですが、当初、このテーマを聞かされた時は、コロナの影響で外国どころか近所に行くことさえままならない状況下に置かれている現状を考慮した上での決定なのかと、さすがに困惑しました。しかしその一方では、旅行そのものができなくなった今だからこそ「インバウンド」について議論し、コロナ後に備えて置くことも重要なのだと改めて思いました。

皆様もご存知のように、日光は他の観光地に比べて観光資源に大変恵まれたところです。日光東照宮など徳川家康が祀られた歴史的史跡をはじめ明治期に建てられた各国の大使館別荘、日本初の外国人専用旅館「金谷カッテージ・イン」、近代産業遺産の光と影を伝える足尾銅山、そして豊かな自然など本当に恵まれています。だから、何もしなくても日本国内は無論海外からも多くの観光客が訪れ、その数年間1200万人（2017年度）とも言われています。東日本大震災の時は原発事故の影響などでさすがに来客が落ち込んだりしましたが、何もしなくてもすぐに観光客が戻ってきました。

ところが、昨年暮れからはじまった原因不明の新型コロナウイルスは歴史上の大災害と違って、私たちの人間関係のあり方や社会性、さらには価値観といった生き方そのものの見直しを迫ってきています。今回、特に大きな被害を被っているのは観光分野ですが、前例のない変化に対応するためには、「コロナ後」を見据えた構造改革に一日も早く取り組むべきだと思います。つまり、何もしなくても、騒ぎが過ぎれば観光客が戻ってくるというような態度では済まされないのです。だからこそ、国際学部附属多文化公共圏センターと日光市は、この未曾有の危機に備えるためにシンポジウムのテーマを「インバウンド」に決めたのだと思えたのは、私一人だけではないと思います。コロナ後を如何に生き抜くか、そのヒントを今日の発表とコメントから窺うことができました。

鈴木富之様をはじめとする講演者の皆様、日光市とその関係者の皆様、バングラデシュとネパールから参加して下さった宇都宮大学元留学生のラハマン・シェイク・ハビブルさんとタマン・ラズクマリさん、国際学部4年生の鈴木アリサさん、コメントを述べて下さった日光市観光経済部観光課長伊東剛さま、そしてZOOMにご参加くださった皆様、本日は本当にありがとうございました。